

---

ショートショートすと〜り〜ず【 愛 】

水瀬愁

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ショートショートすと〜り〜ず【愛】

### 【Nコード】

N6470C

### 【作者名】

水瀬愁

### 【あらすじ】

私は旦那様の妻。高校生だったのは二年前。まだ籍は入れてないから、結婚はしてないんだけど、同棲生活を営んでいる。ラヴラヴなのは仕方ない。だって大好きだもん。そんないつもの朝、高校時代の友人からの電話を受けた私の、ちょっととした愛の再確認なお話

(前書き)

少し後悔がある。

少し……設定とかがなとすぎるかなあと。前作達との共通部はまったくないニューシーズンと言えよう。

ショートショートすと〜り〜ず【 愛 】

幸せですから

「ふんふんふん  
思わず鼻歌。」

いやあ、幸せな私は最近自制心つてものがなくて困っちゃいますなあ。

反省はしてないけど、てへへ。

旦那様を三十分かけてお送りした玄関に未だ立っている私。

さすがに呆れられちゃったかなあと思ったけど、さりげなく向こうも抱きしめてきたりするから……そ、その、止まらなくなっちゃうといますか。

カッコイイ旦那様が悪い。と自分を棚に上げておく。

……そんなことより、お掃除お掃除と。

踵を返したとき、タイミングよく電話が鳴った。

可愛いっってお腹を抱えて笑う旦那様に言われたととて走りをするのと、電話を取ること。優先順位を即座に決め、電話へと急ぐことにした。

だつて無意識だし……ととて走り。

子機さんを手に取り、ピツと鳴るボタンを押すと、耳に当てた。

『はあい？ わかる？ 《みつきい》よ』

高校時代の友人からだった。

確か、大学にいつてるはず。

私と同じ年だけど、人生っているいろいろあるんだなあって自分と比べてしまう。

どっちも幸せなんだろうけど。

「わかるよ。っていうか、久しぶりだねえ どうしたの？」

『新婚生活を満喫してる君に、応援メッセージを送ろうと思ったわけですよ』

「も……もうッ！」

私の旦那様を知っているみつきはいつもこうやって茶化してくる。

でも、本当に今日はどうしたんだろう。急だなあ。

『最近はどう？ 燃え盛りすぎてもう萎んでたりしない？ 線香花火な人生もオツかもしれないけどさ』

「私と旦那様はずっとラヴラヴですッ！」

『ふ〜ん……旦那様ねえ？』

しまった。

旦那様、なんて呼んでるのがばれたら茶化しの餌にされるだけだつてわかってるのに……言ってしまった。

電話向こうにいるみつきが意地悪な算段をしてる気がして怖い。

『……幸せ、なんだね』

しみりと、そんな当たり前なことを言ってくるみつきい。

なんか調子が狂うなあ……いや、別い弄ってほしいなんていう願望があるわけじゃないですから嬉しいのは嬉しいんですけどねなんかいつものみつきいじゃないといふかなんといえますか。

『アンタって、旦那様が裏でこそそそと別の女と会ってる〜とか、考えたりすることはないの？ 愛してるっていう言葉の中身は、実は空っぽなんじゃないかとか思ったりしない？』

「う〜ん」

難しい。

難しいことを言われてるから、素直にそう受け止める。

いや……私が高卒なだけで国語が大の苦手だったからだろうけど。つまり、旦那様とのことに不安がないかってことだね。

「別にないよ。旦那様も私も、幸せだから

何かを隠すこともしてないし、自分を創ってるわけでもないから不満なんかないし。

籍は入れてないけど、私が選んだ一生過ごせる人だから。いつつ自然体だからねえ」

「……」  
「あら、黙らせちゃいましたよ。」

電話だとこういうときに困るなあ。

言葉を搜していると、小さくクスツという笑い声が聞こえた。

途端、耳をキーンとさせるほどの笑い声。

うつ……これが初期微動と主要動というやつですね。勉強になります。

『ふふ……やっぱり凄いな、アンタは』

「どういうこと？」

『難しいことばかり考えてなくて、直進的ってこと。昔からそうだったよねえ』

むむう。これは皮肉でしょうか。ケンカは買いたくないです。

意地悪口調のみつきいが言葉を続ける。

『旦那様とくつつくときも、場所も雰囲気も距離も考えない雄たけびのようなもんだっかし……キスと肌の重ねと結婚の約束と永遠の愛の誓いが、同じ日だったよね。あれは奇想天外だよ。今でも、アンター人じゃないかな？』

「う、うつ……」

思い出したら今でも恥ずかしいことをこの人は……意図的だなッ。

私は反論を試みる。

「で、でもッ。旦那様はそんなところが可愛いよって笑いながら言うってくれるもんッ！」

『……ごめん。それって多分おもしろがられてるっていうか』

お茶を濁すような言い方に首を傾げる。

みつきいはいつもの調子にもどったようだ。うんうん、やっぱりみつきいはみつきいだ。

「みつきいもね、昔から難しいことばかり言ってたけど……恋はね、頭でするものじゃないから。」

愛は二人でするものだし、自分のすべてを委ねられるっていう人を好きな人っていうんだよ」

『……そういう人が見つからない場合は、どうしたらいいんだろうねえ』

みつきは昔っから頭が良い。

だから多分、恋もしたことがない。

私と話してるときは違うけど、他人との関係を計算するような性格してるから……叩いたら馬鹿になるかな？

『そろそろ青春も終わるし、このまま一人っていうのも物淋しくてねえ……アンタはいいよ、悩みとかなさそうだし、っていうかそれでこそアンタだもんね。うんうん』

「むむう……私だって悩みくらいあるもん」

今日の晩御飯の献立でしょ。自由な時間には旦那様のどんなことを考えるかって悩んでるし、サプライズを用意してもいいかなつとか悩みモード全開中。

前に……その……エ、エプロンだけでお出迎えしたときの旦那様、ちょっと可愛かったから、第二弾を企画したいなあって思ってたたり。

ほらほら、結構悩み多いんだよ。

『子供っぽいアンタはモテモテだったからなあ……旦那様以外でも、きつとアンタを狙ってた人は多かったよ。』

もつとゴージャスな未来が広がってたとか、考えたりしないの？』

「ううん……そういうのは考えてないなあ。

だって、旦那様を旦那様にできるのが嬉しくてたまらないから」

本音だから、ちょっと恥ずかしいけどはつきりと言う。

ううん、旦那様に電話がしたくなってきたなあ。

こう、ムズムズするというか……発作？ 電池切れ？

はあっという溜息が聞こえた。

『なんというか、アンタたちのほうには夫の家事貢献への不満なんて、なさそうよね』

「ううん……というか、私がおろおろしていつも旦那様がてきば

きしてくれるのよね」

最初なんて、料理ができなかった私のために花嫁修業紛いのことをしてくれてたし。

ずっと優しくしてくれてるからなあ。

先輩と後輩みたいなの？ いや、先生と生徒みたいのほうが合うかも。

だから私も一生懸命になれるし、お疲れのときは静かにするようになっているし、気配り上手な奥さんになれた……つもりなんだからッ。『理想の夫婦生活ってわけね、安心したわ』

「……………」

なんで安心？

そんな疑問を察したように、みつきが言葉を続けた。

『だって、私にとってアンタたちは羨ましい存在だからさ。』

私もそういう風にラヴラヴになりたいなあとか……ちょっとだけ思っていたり、ね。

でもまあ、アンタのようにには絶対なれないと思うけど』

「ア、アハハハ……」

私もそう思う。

でも、みつきは姉御肌だから後輩に慕われてそうだけど。

「ねえ、後輩さんとかにはいないの？ 良い子」

『へ？』

あまりにもすつとんきょんすぎる声を返された。

『い、いないいいい。いるはずがないっしょ。うんうん、いないいいい……』

……………むむう、怪しい。

内に眠る名探偵の資質を今一度開花させ、ビシッと言う。

「ズバリ、気になる子はいるけど友達かなあって思ってるってわけだね！」

『ぐッ』

わわあ、凶星だったんだ………凄い女のカン

ふむふむ、みつきいにも春の兆しがあるのかあ。

「何か困ったことがあったら、私を頼って良いからね　　うふふふ  
ふ」

『うづ……立場が逆転する日が来るとは思ってもいなかった』

そういえば、私がぐうの音もでないことは多いけど、反対は初めてだなあ。

変わるもんなんだね。あの頃とはいろんなことが、全然違う。

幼稚園、小学校、中学校、高校　その期間よりも短い期間で、  
環境が大きく変化した。

高校生だった私と、妻の私。やっぱり違う気がする。

別の人生が広がってる、かあ……少しだけ、その感情がわかった  
気がする。

でも、それはある意味衝動みたいなものだし。

納得……なんてものではないんだらう。

妙に寂しくなるときもあるにはある。納得できるようなことじゃ、  
ない。

「でも……旦那様は受け止めてくれるんだよね」

いきなり電話したときも、しどろもどろになって切ろうとした私  
を励ますように会話を続けてくれた。

忙しいはずなのに、私をしっかりと抱きとめてくれた。

その温かさを思い出すだけで　迷いはなくなる。

『……まあ、幸せなようであり、今度同窓会とかするつもりだ  
から、旦那様も連れてきな。』

今度朝駆け夜這いの電話するにや〜?』

「あ……うん。待ってるね」

もうすこしみつきいと話していたかったけど、これ以上になると  
距離が離れているってことを実感することになりそうだから、やめ  
ておく。

みつきいが切らない。私が切らない。その無言を数秒味わって、  
唐突に切る。

多分、みつきいも同じだと思う。

ぼんやりと子機を見つめ、そっとそれを置いた。  
深呼吸する。

晩御飯どうしようかな……なんて思いつつ、旦那様のことを思い浮かべる私は、幸せだろう。

とてとと歩いた私の足が踏みしめたのは、あの頃私が歩いていた黒いコンクリートの交通路じゃなく、学校の階段でもない。カーペットの敷かれたリビングの床。

それが今私のいる人生。後悔なく選んだ、道だ。

なんとなく、旦那様の声が聞きたくなった私は、自然と微笑めていた。

幸せの色がどんななのかはわからない。私の掴む幸せも何色なのかわからないけど、幸せなことには変わらない

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6470c/>

---

ショートショートすと〜り〜ず【 愛 】

2009年6月29日19時16分発行